

フロリアードとブルガリアの 原産植物を訪ねる旅に参加して

長岡 求

2012年、第23回目となる花葉会海外園芸事情調査はフロリアードの開催に合わせ、トルコからブルガリアに入るコースを組んだ。期間は当初6月25日から7月4日までの9日間として募集を開始したが、乗り継ぎの関係から7月5日(木)までの10日間になった。オランダではフロリアードを視察し、乗り継ぎ地であるイスタンブールではモスクやバザールなど市内観光をスケジュールに組み込み、ブルガリアは高山植物を見てまわるコースを組んだ。そして国際航空旅行サービス(株)より『フロリアードとブルガリアの原産植物を訪ねる旅』と銘打って募集したところ、かつてないほど多くの36名から参加申込を集めた。

6月26日(火)

9:15に成田空港ロビーに集合。トルコ航空の便が1時間遅れで到着したことから約1時間遅れの出発となった。イスタンブールの空港で米国から参加の石原夫妻と合流。石原夫妻はロサンゼルスでガーデンセンター San Gabriel Nursery を開くことで知られ、メキシコに続いての参加である。イスタンブールまで成田から11時間、そこでの乗り継ぎは1時間ほど。オランダのスキポール空港には22時頃に到着し、近くのホテル

に投宿した。

6月27日(水)

朝7時にホテルをバスで出発してフロリアードの会場があるフェンローに向かう。会場には10時頃に到着。日本国政府出展事務局の田中事務局長と花普及センターから派遣された三井さんの出迎えを受けて入場した。そして、入り口近くにある川口市出展の日本庭園、政府苑の出展ブースがある「グリーンエンジン」エリア、オランダ王国のパピリオンの順で案内していただいた。川口市の出展は日本庭園ということでクロチクなどを使った庭になっていたが、ナツボダイジュ (*Tilia platyphyllos*) がシンボルツリーのように目立ち、日本庭園というには少し異質な感じがした。オランダのパピリオンも見るとその数が少なく、期待はずれだった。唯一、グリーンエンジンはそれなりに植物の展示があり、特に日本ブースは見ごたえがあった。訪問時はサカタのタネの企業出展があり、日本のお家芸といえるトルコギキョウが多数展示に利用されていた。日本ブースのスタッフの面々と出会い、サカタのタネの堀田氏らと記念撮影をした。

以上の3ヶ所を巡ってお昼になり、みんなで食事を



フロリアード ベルギーパピリオンの屋上緑化



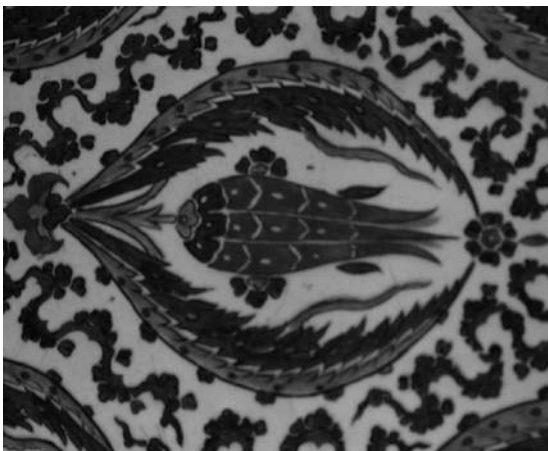
フロリアード ナツボダイジュのエスパリエ仕立て

とり、それ以降16時半まで、約3時間の自由行動となった。私は今回で3度目のフロリアード視察だったが、以前の2回は目新しい花々が多数植えられていたが、今回は種類を展示するというよりも自然風の植栽を目指しているように見えた。会場となったフェンローはオランダの内陸部、ドイツ国境に近い場所に立地し、元々あった森や貯水池を残し、宿根草や日本のワイルドフラワーと呼ばれる秋播き一年草のバラマキ種子による花壇を多用するなど、自然風の修景に工夫が見られた。そんな中でナツボダイジュのエスバリエ仕立てや、東ねたヤナギを曲げたプリーチング仕立てなど、日本では珍しい仕立てが目を引いた。その他、パピリオンのエリアは東南アジアやアフリカなど途上国の出展が中心で、中身は物品販売になっていて、花の文化交流を目指す花博には物足りないと感じた。

花博会場を16時半に出て、そのままデュッセルドルフのホテルに向かい投宿した。

6月28日(木)

朝5時にホテルを出発して空港に向かい、空路イスタンブールへ。イスタンブールには12時頃に到着。迎いのバスに乗り、昼食をとるために橋の下にあるレストランに向かった。昼食後、訪れたのはアヤソフィア聖堂。約1,500年前に建てられた古い聖堂で、壁面はブルーのタイルが貼られ、古い様式が残る数少ない聖堂。トルコの国花はチューリップだが、それはオスマン帝国の時代、国教となったイスラム教が偶像崇拝を禁止していて、キリスト教が聖堂の内部にイエスや十字架、聖者のイコンなどが配置されるのに対して、人物に関係するものが一切なく、代わりに壁面は花などをイラスト化したタイルが貼られている。1,500年前に建てられたアヤソフィア聖堂に貼られたタイルをみると、



イスタンブール アヤソフィア聖堂のタイル

チューリップなどのレリーフが多数使われ、トルコの国花としてチューリップを定めたのはこのような文化に由来する。ちなみに、オランダにチューリップやランキュラス、アネモネなどが渡ったのは500年前のことで、当時のオスマン帝国で園芸化されていたチューリップ(トルキスタン・チューリップという)が欧州に渡り、更に改良されて現在のチューリップが生まれている。おそらく欧州の園芸文化のルーツはオスマン・トルコにある。アヤソフィア聖堂のタイルは様々な花がレリーフとして使われ、皆でその花の名前を推測しながら撮影した。

次はその近くにあったオールドバザールの視察。観光名所のひとつになっているが、アーケード街を中心に香辛料や宝石類、洋服などのお店が並び、多くの人で賑わっていた。アーケード街の外には園芸品やペットショップが並ぶ路地があり、ペットと園芸をセットにするのは世界標準なのかもしれないと感じた。並ぶ商品は品質が悪く、また鉢物というよりも苗物が中心だった。観葉や洋ランを売る店もあり、ファレノプシスの単鉢があったので値段を聞いたところ1,800円ほどで、他の商品が安いと感じられるのに対して割高だった。おそらくオランダからの輸入だろう。

その日の最後はフェリーを使い、欧州側からアジア側に渡った。アヤソフィア聖堂などがあるのはギリシャに近い欧州側で、古くは東ローマ帝国(バチカン帝国)の首都があった旧市街であり、所々にバチカン帝国の崩れた城壁が残っていて、古い教会も多い。マルマラ海を渡ったアジア側は近年市街化が進んだ地域で、庶民の住宅が多いという。わずか30分ほどでアジアと欧州の間を行き来できるのがイスタンブールであり、シルクロードの起点であることを実感できた。古来よりイスタンブールは交易で栄え、結果多くの金持ちが生



イスタンブール オールドバザールにて鉢物の販売風景

まれた土地という。今も億円単位の貯蓄を持ち、その利子（年率7%台）で生活する金持ちが400万人もいるという（トルコの全人口は8千万人ほど）。

この日はフェリーで旧市外側に戻り、夕食をとってホテルに投宿。

6月29日（金）

朝8時半にホテルを出発し、夕方まで市内観光とショッピング。

まず訪問したのはスルタンアフメット・モスク。それはブルーモスクの名前で知られるモスクであるが、建築当時はブルーを基調としたタイルと絨毯、そしてステンドグラスの窓で知られたことに由来する呼び名という。20世紀の初めにロシア軍の襲撃で破壊され、今はその面影もないが、その襲撃の原因が日本と関係があるという。つまり、オスマン帝国は日本に初の使節団として軍艦エルトゥール号を明治23年（1890年）に派遣したが、その帰路、台風に襲われて和歌山県樫野崎灯台沖の岩礁に衝突して沈没。500名以上の遭難者を出したが、当時の大島村村民が総出で乗員を救出し、69名が救われ、明治政府が軍艦を出してイスタンブールまで送り届けた。それからまもなくして勃発した日露戦争（1904～1905年）の折り、ロシアの黒海艦隊がボスポラス海峡を出ようとしたとき、イギリスなどの要請とエルトゥール号遭難事件への恩義からオスマン帝国は海峡を封鎖した。ブルーモスクの破壊はそのときの遺恨が原因といていた。ちなみに、エルトゥール号事件からブルーモスクの襲撃に至る事件を、今もトルコ人の29%が知っているとか（現地ガイド談）。

次に訪れたのは博物館となっている元王宮。オスマン帝国時代の様々なものが展示されていた。最後の皇帝は財産の9割方をもってモナコに逃亡し（現在、その子孫はフランス在住）、展示してあるのは持ち出されず残ったものということだったが、数多くの金製品を含めて膨大な点数があり、当時の皇帝の資産は想像も出来ないという。

次はトルコ絨毯の製造方法を見せながら販売する業者を訪問。ペルシャや中国などの絨毯がシングルノットといわれる織り方なのに対して、トルコ絨毯はダブルノットで織り込んでいるとのこと。その製造の実際を見せてもらい、説明いただいた。材料は羊毛、木綿、木綿と羊毛、絹とあり、また折り目の数は1cmあたり40～50目から400目を超えるものまであり、素材と目数で値段が変わるとのこと。一番高いのは絹を使ったもので、中でも天蚕を使ったものが高いといい、3.6m

×4.5m程度のサイズで200万円を超えるのが相場で、名の知れた一族が織る物は1千万円を超えることもあるという。最後に材料の違いをどう見分けるかなども教えていただいた。話を聞いた後、営業セールスとなったが、一人が小さなものを買った以外は逃げるように会場を後にした。ところが、その下のフロアにはトルコ石などの宝飾品の売り場があり、そこで購入した人は10名を超えていた。3万円から10万円程度のもので中心で、50万円以上の売上があった様子。

次はトルコを代表するグランドバザール。前日のオールドバザールに比べて一回り大きいですが、今回は参加人数が多く、スリがいて、さらには通路が複雑に入り込んでいるために迷子になる危険があり、メイン通りを往復するのみとした。

以上でイスタンブールの視察を終えて、空港に向かい、その日のうちにブルガリアの首都ソフィアに入って投宿した。

6月30日（土）

朝7時にホテルをバスで出発し、一路ピリン国立公園に向かう。ピリン山の最高峰は2,915mで、ブルガリア国内で2番目の高さ。途中、2回のトイレ休憩を取り、宿泊予定のバンスコの市内を通過して標高1,800mほどのBunderista Areaまでバスで登った。そこで、お弁当を食べてVichren hutまで標高差200mほどのコースをトレッキング。案内は通訳のイリヤナ、マウンテンガイドのビリヤナ、植物の案内はソフィア大学のDr. ペトロバの女性3名。ソフィア大学は日本の東大に当たる大学。Dr. ペトロバはさすがに良く植物を知っていた。イリヤナさんもソフィア大学を出て日本の学芸大学に留学し、日本語は達者。弟が雑色駅近くのブルガリア料理専門店に働いているという。今回は参加人数が多く、高齢者が多いことから、コースは行きと帰りを同じにして、最後の集合時間を決めて、各自、自分の体力や体調にあわせて、行ける所まで歩くという計画にした。1時間のコースをもつばら写真を撮りながら歩き、2時間以上をかけて目的地に到着。途中、バルカン半島固有種のムシトリスミレ *Pinguicula balcanica* に会うことができた。誠文堂から出版された食虫植物写真集に掲載しようとして出来なかった種類で、日本では未知の種。みな感激していた。帰りは40分ほどで帰ることが出来た。万歩計で見ると2万歩強を歩いたとか。

当日はバンスコ市内のホテルに17時頃に投宿。当日に撮影した写真をパソコンに落とし、Dr. ペトロバさん



ムシトリスミレ *Pinguicula balcanica* ピリン国立公園

に見てもらい、学名を覚えてもらった。

7月1日(日)

朝8時に出発してリラ国立公園に向かう。リラ山はブルガリアの最高峰で標高2,925m。水が豊富にあり、ピリン山と植生が異なる。投宿予定のケンピンスキホテル(ホロベッツ市内)の駐車場にバスを止め、ゴンドラで標高1,500mほどから2,300mまで昇り、そこでお弁当を食べ、前日と同様にトレッキングに入った。目的地はMusala Hut、約1時間のコースだが、前日と同じく、写真を撮りながら2時間以上の時間をかけて歩いた。ここでは所々に残雪があり、春の花から夏の花まで見ることが出来た。黄色のリンドウ *Gentiana punctata*、リラ山の固有種のサクラソウ *Plimula deorum* などを見ることができた。とにかく種類が多く、楽しい観察会になった。

トータルで4時間ほどを散策。逆コースでホテルに戻り投宿。

7月2日(月)

朝8時に出発してユネスコの世界遺産に指定されるリラ修道院に向かう。



黄色のリンドウ *Gentiana punctata* リラ山

まず、クリスラ村を過ぎたところに広がる草原に車を止めて植物観察。この草原は所々が畑に変わり、土地が痩せると草原に戻すという使い方をしており、コウノトリの餌場として保護されている様子で、ヤナギランやミソハギなど多くの花が咲いていた。

次はコウノトリの村として知られるKocherinobo村に寄る。ここではコウノトリが煙突に巣を作っても巣を壊さないなどの保護策をとり、あちこちの煙突にコウノトリの親子がいた。

リラ修道院は前日登った場所から見るとリラ山の裏側にあり、ホテルからバスで約2時間ほどかかった。リラ修道院はイヴァン・リスクルという一人の聖人が岩窟に暮らしたことに始まる。イヴァンはリラの聖イオアンと呼ばれ、今もブルガリア正教の聖人として知られる。最初の修道院は第一次ブルガリア帝国の10世紀に創立された。その後、11世紀初頭に帝国は滅亡し、一時は東ローマ帝国に支配され、12世紀末から15世紀末まで第二次ブルガリア帝国として独立、更にオスマン帝国に併合された。リラ修道院は第二次ブルガリア帝国の時代に大いに栄え、ブルガリア人の心の支えとなり、オスマン帝国の支配下に入った後もブルガリア正教とブルガリア語、そしてブルガリア人が発明した



サクラソウ *Plimula deorum* リラ山

キリル文字を守り、継承する中核的な場所になったという歴史をもつ。

リラ修道院は一部が博物館として公開され、博物館を視察した。続いて、バスで更に奥に入り、キャンプ場がある場所にバスを止めて昼食をとり、周辺の野生植物を観察した。14時を過ぎてソフィアに向かい、6/29に宿泊したソフィア市内のホテルに戻った。そして、夕食をとる目的で、近くのレストランに行った。そこはブルガリアの民族舞踏を見せるレストラン。ブルガリアの民族舞踏と言われてもピンとこなかったが、英語で folk dance フォークダンスとなるが、それは欧州各地に伝わる伝統的なダンスを指す。ブルガリア・フォークダンスは8分の6拍子を基調とする踊りだった。若者たちが踊る激しいダンスと、ゆっくりしたライダンスがあった。

7月3日(火)

朝8時に出発し、ビトシャ山に登った。ビトシャ山はブルガリアの中心部を東西に走るブルガリア山脈の西端に位置し、その北側と南側で気候風土が大きく異なるという。また、ブルガリア山脈とドナウ川に挟まれた地域をトラキア地方というが、そこは紀元前5千年頃のトラキア人の遺跡がある。世界で初めて金の細工を作ったがトラキア人で、エジプトなどで発掘された黄金類は古くはトラキア製とか。

ビトシャ山は2,000mほどの山で、気軽に登ることができることから人気の山という。当日は、前日に発生した山火事により登山道が一部制限され、スキー場

の周辺を3時間ほど歩いたが、途中まで行くと山火事の煙が流れてきて、早々に引き返した。そして15時頃に市内に戻り、ブルガリア正教の寺院、スーパーでのショッピングをした。

7月4日(火)～5日(水)

朝7時にホテルを出発し、ソフィア空港に向かう。そして、ソフィア～イスタンブール～成田と帰路についた。成田には5日の10時過ぎに到着。そこで自由解散となった。

今回のツアーは36名の参加があり、しかも平均年齢69歳ということからいろいろ不安もあったが、幸いにも大きな事故もなく、参加者全員がほぼ全てのコースを踏破できた。それは、添乗員としてツアーの先頭に立った国際航空旅行サービスの青木社長の献身的な先導があつてのことであり、青木社長には御礼を申し上げたい。

視察地に関して、フロリアードは3回目の私は正直がっかりしたが、トルコのイスタンブールでは花の歴史などを垣間見られ、楽しい時間を過ごすことができ、また今回の主目的地であるブルガリアはたくさん的高山植物に出会うことができた。個人的にも、ブルガリアの賞味4日間のトレッキングで、1,200カット、160種ほどの写真を撮り、その豊富な植生に驚き、期待以上の成果を得たと感じた。